

第 93 回公開シンポジウム

子どもを人間としてみる保育

◆ プレゼンター

汐見 稔 幸

白梅学園大学学長／教育人間学

◆ パネリスト

水谷 豊 三

学校法人成城学園認定こども園日吉幼稚園園長

◆ 司 会

一色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 93 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもを人間としてみる保育」というテーマです。保育で最もいけないことは子どもを子ども扱いすることだと思います。子どもたちは私たちのように経験は多くありません。大人のように社会や文明の影響をまだあまりうけていないが故に、人間としての自然性を豊かに持った独自の人格なのです。そう感じるところから保育を始めると、子どもも保育も違って見えてくる。そこに保育のすばらしさがあります。

今日はお二人の先生をお招きしていますが、お一人はプレゼンターで基調講演をしていただく白梅学園大学学長の汐見稔幸先生です。汐見先生のご略歴を申し上げます。東京大学大学院教育学研究科の教授を経て 2007 年 4 月から東京にある白梅学園大学教授で副学長となりその 10 月に学長に就任されました。汐見先生は学長のためご多忙でいらして、いつもこの子ども学講演会を木曜日に開催していたのですが、木曜日は大学で会議がたくさんあるということで、今日、土曜にお越しいただきました。先生のご専門は教育人間学、教育学、育児学で、育児学や保育学を総合的な人間学と考えていらっしゃると思います。ここに学問の光を注ぎたいということで、保育のことについていろいろな角度からお考えをお持ちです。それとともに、例えば「クレヨンしんちゃん」など、これは保護者の方からはけしからんという方もいますが、これは最高の子育ての教科書だとおっしゃっています。ユニークな子育て論を展開することでも知られております。

それからもうお一人、汐見先生のお話を受けて現場の先生として、水谷豊三先生にお越しいただいています。水谷先生は学校法人成城学園認定こども園日吉幼稚園園長で理事長もされています。大阪府私立幼稚園連盟、これは 416 園が所属していますが、そちらの理事長もされています。

それでは早速、汐見先生のお話を伺いたいと思います。

汐見：皆さん、こんにちは。汐見と申します。時間も限られていますので、すぐに本題に入ります。

今日、皆さんと一緒に考えてみたいのは、日本の保育の体質、私たちの子育ての知らないうちに持つ

ている特徴、そういうのを見直してみようということです。そのために、私たちは子どもという存在をどのようにみなければならぬのかということから、あらためて考えたいと思っています。それで「子どもを人間として見る」というタイトルにさせていただきました。このタイトルは、この前ミネルヴァ書房から同じタイトルの本が出たのですが、そこからもらっています。この本は、東京大学で私の同僚だった、そしてその後、青山学院大学に行って、今は信濃教育会で会長している佐伯胖さんという心理学者がいるのですが、彼が基調講演をしたある研究会の講演をベースに、その佐伯さんが属している保育の研究会のメンバーが中心になって編んだものです。この本は皆さんにとって参考になること間違いないと思います。この本に私も寄稿をさせていただいて、今、この言葉が保育を見直す時のキーワードになってきていると思っています。

さて、子どもはやはり人間として見なければならぬと考えている理由ですが、簡単にある角度からお話します。それは、日本の子どもの育ちの現状に対する認識からきています。

私は仕事から、日本の若者たちと接することが多いのですが、彼らに対して、私たちにない、いろいろな可能性を持っていて、羨ましいと思ったりすることがあるのですが、反面で、日本の若者の育ちには、外国人から見ると「えっ」という面もあるわけですが。私たちは、中にいるとそれがよくわからないのですが、ヨーロッパ人が見たりすると、どうして?という面が確かにあります。

例えば、最近日本を知りたいという若者が少しずつ増えてきて、日本に留学する人が増えてきています。この間、そうしてスイスから日本の高校に留学に来ていた高校生がテレビに出て、日本の印象を語っていました。そこでそのスイスの女子高生は、日本の高校生に対する感想としてなんて言ったと思いますか。多分皆さん、想像つかないと思います。彼女は、日本の高校生はどうして政治のことを議論しないのかということです。私たちはそういうことばかり学校で議論している、日本は原発問題などいろいろあるのに、どうして高校生たちは議論しないのか、不思議でならない、こう言っているのです。へえーと思いませんか?

私の妹家族はイギリスに何十年と暮らしています。彼女がイギリスで出ている日本語新聞を、面白いこと載っているからと送ってくれたことがあります。在英日本人のための日本語新聞です。その中に毎号コラム記事があるのですが、ある号が教育についてなので、参考のためにと送ってくれたのです。フランク・ロビションさんというフランス人でしたが、彼は日本に留学をしている学生です。日本の友人はたくさんできましたかという質問には、そうでもないと答えていました。旅行にも、留学生同士で行きますと。なぜですか、という問いに、悪けれども、日本人の学生といってもちっとも面白くない、彼らは何も考えていないからだということです。女の子はファッションショーのような格好をして大学にくるし、大学生なのに親に車を買ってもらって車で数学する人がいる。ヨーロッパでは考えられない、ということです。

これには半分悔しい思いをしましたが、半分そうなのかもしれないと正直思いました。政治のことを議論しない。これは日本の最近の若者の特徴なのかも知れません。若い人を次の世代を担う大事な政治主体として扱うのだったら、あなたは自分の国をどう作るのかについてきちんとした議論し、自分の考えを持ってください、こう社会は要求するはずですよ。ともかく自分の考えをしっかりと持ってほしいと。そのためには、大いに議論してほしい。原子力発電所であのような深刻なことが起こった、これ

からどうするのか、若者こそもっとも関心を持って議論してほしい。これが社会の期待だと思うのですが、実際には外国人からも不思議がられてしまうほど政治について議論していないのですね。

原子力発電所問題が出ましたから一言つけくわえますと、27年、28年前に当時ロシアのチェルノブイリという町で原子力発電所が爆発しました。その後、周知のように大変なことになりました。放射能のある塵がヨーロッパに全部に飛んでいってしまった。それでイタリアのブイトーニのパスタから放射能が出たとか、スウェーデンでトナカイの肉に放射能が出て、トナカイを食べることができなくなったとか、大きな問題になりました。

ニュースステーションというテレビ番組があるのですが、そのキャスターをしていた小宮悦子さんが、そのときイタリアに取材に行ったのです。ある中学校を訪問したのですが、中学生たちは授業をそっちのけで、原子力発電所問題を議論していました。廊下には立て看板がズラリと並んでいて、2年何組は原発はなくすべきだと決議したとか書いてある。小宮さんがあるクラスに入ると、日本人が来たと大歓迎されたのですが、小宮さんにイタリアの中学生たちが質問することになったとき、日本は原爆を落とされて放射能を恐ろしさを知っている唯一の国なのに、なぜ、原子力発電所が48箇所もあるのですかと質問してきたのです。その時に小宮さんがはよくご存じなかったようで、えっ！日本には48箇所も原発があるのですか！と驚いていました。イタリアの中学生たちは、イタリアに原子力発電所を作るべきかどうか、今ある原発についてどうするか、などについて自分たちで議論をしているのです。そのためには、原発とは何かということを知らなければならないので必死になって勉強する。当時日本は48箇所ですが、今は54箇所にもなっています。それをイタリアの中学生がみな知っているのに、肝心の日本人がよく知らない。

何のために学校に行っているのかいうと、それは良き市民になってもらうため、とイタリアなどでは考えるのですね。あなた方は自分が生きている社会をよい社会にする責務がある。そのためには、社会の中での大事な問題について自分の意見を持たなくてはならない。だからそういうことについては大いに議論しなさい。これがイタリアの論理だったということです。計算力は日本ほど高くないかもしれないけれども、そういうことについて意見を持つという点では、日本とはかなり違った期待を若者に行っているということですね。

私たち団塊の世代は結局環境問題にしても、解決できなかったわけです。むしろ問題を作ってきた世代です。だから私たちは、若い人たちに申し訳ないが後を頼むと本気になってお願いし、期待しなければいけないと思うのですけれども、現実には残念ながらそうなっていない。

ちょっとデータを見てください。これは日本青少年研究所が若者の心の育ちについて調べたものです。これは、2002年で少し古いのですが、日米中3カ国の高校生の調べです。「私は他の人に劣らず価値のある人間であると思いますか」というアンケートに対して、よく当てはまる、まあ当てはまるにマルをつけた高校生が何パーセントいたかというものです。アメリカは89.3%、中国は96.4%でしたが、日本の高校生はわずか37.6%でした。日本の高校生は6割以上が「自分にはいいところがない」と答えたのです。これは、話題になったデータでした。なぜこうなったのか。いいところがないというのはありえないのです。皆いいところを持っているのに、なぜそのように意識をしていないのか。謙虚であ

るということも大事ですが、それを超えてしまっているデータだということですね。それから8年経った2010年に、研究所は同じような調査をします。今度は韓国も入りました。そこで発表されたデータは「よくあてはまる」だけで「まああてはまる」は入っていませんから、前回よりは数字は小さくなっています。例えば、「私は価値ある人間だと思う」に対して、アメリカの高校生は57%、中国は42%、韓国は低くて、20.2%でしたが、日本はというとわずか7.5%、韓国の3分の1しかありませんでした。「自分を肯定的に評価する方だ」というのは、アメリカ41.2%、中国は38.8%、韓国18.9%—韓国はだいたい中国の半分ぐらいですが、日本はその韓国の3分の1程度で、6.2%です。「自分に満足しているか」は、アメリカ41%でしたが中国21.9%でアメリカの半分しかありませんでした。かなり欲求不満がたまっている印象です。韓国は15%でやはり低かったのですが、日本はその韓国の三分の一以下でわずか3.9%でした。日本の高校生で自分は満足するというのは、100人中4人もいないのです。「自分が優秀だと思うか」というのは、アメリカは58.3%で、正直、これは少し多すぎる気がします。中国は25.7%、韓国は10.3%でしたが、日本はやはり低くて4.3%でした。

こうした調査の結果、日本の若者人はいわゆる「自己肯定感」がとても低いということが分かるのですが、これは文字通り低いと受け取る必要はないと思います。こうした調査をするとき、自分をできるだけポジティブに評価することがいいことだとされている文化と、それを少し傲慢だと評価される文化では、当然同じ心性でも自己評価の言葉は反対になることが十分予想されるからです。つまり、このデータは、自分のことを低く評価することが励まされる文化のもとで日本の若者は暮らしているということを表しているとも受け取ることができるわけで、問題は、むしろそこにあると思っています。

私は日本の高校生には優秀な子がたくさんいると思うし、面白い子もたくさんいると思っています。だけど、自分を肯定的に自己評価することがはばかれる文化で育っていると、人に自分の本音を見られたくないとか、弱点いっぱいのもいいじゃないかと居直ることが苦手になるのではないかとと思うのです。特に弱点や弱さがあっても、それも自分の一つと上手に居直ることができないと、生きていくのに苦勞するし、子育てをしているときにはそれがマイナスに出てくるので気をつけなければならないと思っています。失敗したりミスしても、あ、またやっちゃったという人は、そういう自分も自分と居直って自己受容している人ですから、それで苦しむことは少ないのですが、そう居直れない人は、自分を責めてしまいますよね。私は子育てが下手な親でごめんねと居直れなくて無理をする。無理していいママを振る舞おうと努力する。すると、ママがこんながんばっているのにどうしてあなたは応えてくれないの!という気持ちになりがちです。「ママ少しさぼりたいの、ごめんね」と言えればいいのに、それが言えない。つまりいい母親にならなければいけないと無理に思う。これでは子育てが疲れますよね。ごっくばらん人間関係もうまく作れなくなってしまいます。

日本の若者の中に増えているのは、引きこもりです。引きこもっている若者は100万人近くいるのではないかというデータもあります。引きこもりというのは特に理由はありませんが、社会に出るのが不安になったりして、外に出られなくなってしまう。仕事に失敗して叱られると次の日から会社にいけなくなるなど、いろいろなケースがありますが、2年も3年も家から出ないというのを引きこもりの若者といいますが、どう調べても100万人ぐらいいるといわれています。私の知人が社会学の国際学会で、そのこ

とを報告したら、欧米の研究者が大騒ぎをしたそうです。どういう若者なのだ。どうして家から出れないのだ。イメージできない。病気なのか。なぜ、出れないのか。誰が食べさせているのか。それは親です。どうして親が食べさせるのか、どうして親は追い出さないのかと言って議論になったそうです。つまり欧米には見られない現象だということです。日本だけ100万人もいる。今、台湾、韓国にも出てきていますから、日本だけとは言えなさそうですが。それから、30代以下で本来働いているべきなのに働いていないで家にいるいわゆる無業者が日本全体で220万人程度いるそうですが、その多くの人にはレジリエンス、つまり危機があったときからの回復力が弱いという指摘があります。自己肯定感というよりも、ちょっとしたミス、失敗でも大丈夫という居直り力が十分育まれていないといった方がいいかもしれませんが、ともかくそういう状況があるのです。これも日本の子ども、若者が世界から見たら少し心配となる状況の一つですね。

関連するデータをもう少し見ていただきます。これは、少し古いデータですが、子どもの成長についての母親の満足度比較という10年以上前のデータです。これは、文部科学省の外廓団体の女性学習財団が行った調査ですが、「あなたは自分の子どもの育ちに満足をしていますか」という質問に対して、「満足をしている」と直に答えた母親の割合です。満足、やや満足、やや不満、不満の選択肢があるのですが、そのうちの「満足」の%です。0歳から3歳の子どもを育てている母親に聞いたら、満足と答えた母親は、日本は68.7%しかいませんでした。アメリカ、イギリス、スウェーデンは93%、92%、94%といずれも90%以上です。子どもの年齢が4歳から6歳になると、日本の母親の満足度は53.7%で15%も下がってしまいました。アメリカ、イギリス、スウェーデンも下がるのですが、88%、89%、89%で、9割程度は満足しています。子どもの年齢が7歳から9歳になると、これは、小学校に上がり、成績などもありますから下がるのですが、日本の母親は50%を切ります。アメリカ、イギリス、スウェーデンもさがりますが8割前後でとどまっています。ところが、子どもが思春期に近づいてくる小学校の4年から6年生頃になると、日本の母親36.3%まで下がります。満足しているのは三分の一強になるわけです。ところがアメリカは82.4%にイギリスも78%から83%に戻ります。大体83.4%程度で安定してきます。これを見た時に私はとても悲しくなりました。あんなに一生懸命子育てをしているのに、子どもが大きくなってくれば大きくなっていくほど子どもに対する満足感が下がってくる子育てとは一体何なのか。思春期になると3人に1人ぐらいしか満足感を持たなくなる。子どもに対する満足感が低くなると、不満が増えますから、注文が増えますし、小言が多くなる。子どもに対する思いというのは、皆同じだと思うのです。けれども、うちの子どもは面白いと言っている方がお母さんのメンタルヘルスがいいと思うのです。そうなれば、子どもに対する接し方も柔らかくなるでしょう。不安が強いとガミガミがどうしても増えます。このように、日本のお母さんが自分の子どもを産んでよかったと思う人が世界の中でとても少ない方だということと、日本の若者に自尊感情、自己肯定感がとても低いということが、どこかで繋がっている気がしてなりません。

なぜ、そうになってしまうのか。精神科の医師たちも、なぜ日本の子どもたちがいわゆる自尊感情が低いのかをいろいろと調べ始めています。その中で、あるお医者さんの仮説で、それはとりわけ0歳、1歳、2歳の育ち方によるのではないかという説が参考になると思います。乳児期の育て方が一番大きく

影響するというのです。エリクソンという精神分析学者がいるのですが、彼のいう8つの発達段階の最初は大体0歳、1歳、2歳ですが、お母さんが忙しくて授乳してくれないのと、訴えればきちんと授乳させてくれたりオムツを替えてくれる。そのような葛藤の中で、やはり自分は安心なのだ、いつでも助けられるのだという感覚を身につけることがこの時期に身につけなければならない感覚だといいます。これをエリクソンは、ベイシクトラスト、基本的な信頼感といいます。流行の言葉で言えば、ありのままのあなたでいいといって愛してくれる信頼感ですね。この0歳から2歳の時に、子どもはいろいろないたずらを始めます。そういう時に、昔のおばあさんたちは、「この子はいたずら好きな子どもだね。そういうのは隠しておいたほうがいいよ。ちょっとおじいちゃん、面倒みてあげて」と言って決して頭ごなしで叱ったりしませんでした。これは、子どもにとってはとても大事なことです。子どもはやっていいことと悪いことはわかりませんから、興味を持っていろいろとやってしまいます。そういう時に頭ごなしに叱られると子どもはぎくっと感じます。そして、なぜこれが駄目なのか理屈がわかりませんから、とにかくやったことを否定される、叱られるとなると、自分の存在そのものが否定されてしまうわけですから、とても不安になってしまいます。そうならないためには、親に叱られないようにするしかない。しかしそうしていると、自分の本当の気持ちが段々と出せなくなってしまいます。つまり、ありのままの自分では駄目らしい。ここで投げたい、ここで引っ張ってみたいという自分では駄目らしい。だから親の期待に沿ったようにやっていかないと自分を愛してもらえないらしい。そうなって、自分のありのままをそれでいいと思えなくなる。自分の欲求に沿って行動してもいいというのが自尊感情のベースですから、その自尊感情を最初から多少とも否定されていくわけです。一部の精神科の医師によると、日本の子ども、若者に自尊感情、自己肯定感が低いのは、どうもそれが原因ではないか、というわけです。

このことと関連して、私たちは、子どものできないのを見てしまう傾向が強くなっているのではないかとすることも考えておきたいと思います。人間の伸ばし方には大きく分けて二種類あります。一つは子どものダメなところ、できないところを指摘して、そこを伸ばすように要求する方法です。もう一つは子どもの中に胚胎しているもの、その子に可能性としてあるものを見つけて、それを伸ばしていくことを要求する方法ですね。分かりやすく言うと前者は今ないものを手にれる方法で、後者は今あるものを伸ばしていく方法と言っていいでしょう。当然、両方あっていいのですが、自分のことを考えたら分かりませんが、やはり子どもの頃は、すでにあるもの、私の中に芽生えているものを伸ばして洗練していく方がやる気が出ます。自分にないところを身につけ伸ばしていくのは、考えてみたらあまり上手な方法ではないかも知れません。でも、親というのは自分の子どもへの期待がとても高いものですから、どうしても他の子ができていて自分の子ができてないと、そこをさせようとして懸命に要求するわけです。自分の子の嫌なところを見たり、他の子どもができていないことができていないとすぐに頑張れと要求してしまいます。その結果、自分の子どもを評価するときも、できないこと、いやなことはよく見つけるのに、できること、その子の面白いところを指摘するのが苦手となりがちです。

よくお母さんたちは、「早くしなさい」と言いますが、それはある意味親のストレスの発散みたいなもので、言わないといられないのかもしれませんが、いつもそういうられる子どもの方にとってはあまりありがたくありませんね。その根っこには、わが子にないものを獲得させようとする子育て観があるわけ

です。そういうときは、そうではなくて、「そんなに忙しいのに、こんなにゆっくりできる私の子どもはひょっとしたら大者なのかもしれない」とちょっと考えてみる。そしてよく観察するわけで。するとあの子は、何でも丁寧にしなれば気がすまないタイプなのかも知れないと気がつくわけです。折り紙をしても、重ならないと何度でもやり直してしまう。だから時間がかかり、親から見ると愚図に見える。でもこの年齢からきっちりやりたいというのは、ひょっとしたら珍しいことで、いいものを作りたいという気持ちいっぱいがあるからかもしれない、考えてみたら、あの年齢であんなにきっちり紙を合わせたいという気持ちを持っている子どもは少ないのではないか。こういう子どもは、うまく伸びると、どんな仕事をしてもしっかりできる子どもになるかもしれない。そうか、そうだとしたら、この子には、「早くしなさい。」と言うのではなく、「あなたはあのゆっくりやるところが持ち味なのだから、あなたのペースでゆっくりやりなさい。あなたがゆっくりときっちりするのがママは好きよ」と言えばいいのだ、と気がつきます。その子はその方が間違いなく伸びてきます。つまり、子どもを見るときに何ができないのかを見るのではなく、その子の持ち味の芽は何だろうといつも見ていくという子ども観、そこにその子の個性つまり持ち味の芽を見いだしていくという子育て、保育、それが大事だということです。

子どもは誰でもいいところがあるに決まっています。しかし、それはその子を見る大人にまなざしの柔らかさ、善く見てやろうする善意、そういうものがあって初めて見えてくるものなんですね。

私は、子どもを人間として見るというのは、いろいろな意味があると思っています。この子どもは世界にたった1人しかいない子どもで、この子は自分がこの世の中に生まれてくる時も親も場所も選べなかった。けれども、この時代に、この日本という環境で、この親、この兄弟関係のもとで生きるということだけは背負わされてしまう。これが人の運命で、自分が生まれてくる条件について、子どもは一切選べないわけです。選べないのに、その条件で生きることだけは引き受けさせられてしまう。一切納得をしないで、です。だとしたら、育てるとは何なのか。あなたは生まれることについては一切選べなかったかもしれない。私たち親のエゴかもしれない。でも、あなたには、私たちのいのちを継いで生きてほしいし、生まれてきてよかったと言えるようになってほしい。だから私たちは、生きるということはこんなに面白いことだったんだと思える体験をこれからたくさんさせてあげる、そして生まれるときの条件は自分で一切選べなかったのだから、生まれたあとはできるだけ自分で選んで生きるようにさせてあげる。できるだけあなたが自分で選びなさい。何をしたいのかをどんどん表現してね。私たちはいつもあなたに「あなたは何がしたいの？何をしてほしいの？」ときいて、それに応答していくからね。でも世の中にはしてはいけないことがあるので、それだけはわかって。それ以外はできるだけあなたがしたいことを主張すればそれを満たすように努力するからね。

これが子どもを育てるときの基本スタンスだと私は思っています。それは子ども・大人ということを超えた、子どもを人間、いのちを継ぐ者としてみるという見方です。

それを今風にいうと、子どもの自己選択とか自己決定ということをできるだけ尊重する、ということになるでしょうか。親の言うこと聞きなさいというのではなくて、あなたはどう思うの、それできるだけ聞いてあげる。そしてそれに誠実に応答する。私は親の責務はそこにあると思っています。教育とか育児とか保育は、ひたすら子どもの気持ちを聞いてあげてそれに応答することだと思っています。あなたは何

をしたいの。何をしてほしいのか、そういうスタンスで聞いてあげる。そうして聞いてそれに応答することをキリスト教ではそれを隣人愛といいます。あなたは何をしたかったのか、何をしたいのか。そしてそれに答えること。応答してあげること、レスポンスすること。レスポンスする能力アビリティのことをレスポンスビリティといいます、応答能力のことです。これ親の能力として大事だということですが、日本語ではこのレスポンスビリティを「責任」と訳しています。応答する能力を持つことが親の、大人の責任なのです。

ケアとか保育も教育も、この人が何をしたいのか、何をしたいがっているのか、その深いところにあるものを聞き取って、それに応答してあげることが基本なのです。私たちは、子どもの気持ちに応じて応答する存在だと思っています。ただし、その子どもの気持ち、何をしたいのか、何をしたいがっているのか、ということ子ども態度や表面的な言葉をそのまま受け止めてそれに答えるということではありません。それでは子どもはわがまま放題になるだけです。そうではなく、そうした表面的な要求のうしろに隠れているその子が人間として生まれてきたことを喜びと感じたいと願っている、その深い願いを、聞き取り感じ取ることなのです。そういうことができるようになることを保育者、教師、親は課せられていると言ってもよいでしょうね。そしてそれができるとしたら、それは保育者、教師の深い人間理解力と共感能力の産物というしかありません。そうして、子どもは自分は自分の人間としての深い欲求に基づいて生きていて、その欲求を持っていること、それを満たそうとしていること、その主体はすべて私である、という感覚、つまり私の主人公は私であるという感覚が手に張っていくわけです。これはこれまで見てきた自尊感情のもっともベースにある感覚です。

1つの事例を紹介します。これは、私のところにメールを送ってくる現場の保育士さんのメールです。2歳児のブランコ指導のお話です。

「これまで何気なくやっていたことなのですが、イチ、ニ、サン、シ…ジュウがきたから、はい、交代。他の子どもが待っているでしょ」というやり方に疑問が出てきました。これは何気なくしてきたことなのですが、いつまでもその方法でいいのかなと、子どもの姿を見ていて思うようになりました。子どもとの関わりの中でその場面や年齢、育てたいことによって方法はいろいろあっていいのかなと思うのです。I先生が15年ぐらい前にその子どもが替わりたいと言うまで、乳児期はできるならば十分に乗せてあげて、乗りたい、揺れたいという気持ちを一人ひとり満たしてあげて欲しい。そこを保障することが大切だと言われていたことを思い出します。

15年前の私は、そんなやり方でやったら乗れない子どもがでてくるし、乗れない子どもへの保障はどうするの、それは平等なのかと思っていました。でも、この3年の間に毎年続けて2歳児クラスの担任をするクラスに恵まれ、2歳児の気持ちとじっくりと関わる機会を得て、その考えが揺らいできました。2歳児クラスの子どもたちに毎年その方法を試してみたら、私もI先生のようにまずは、そこの子どもの思いを十分に満たしてあげることから、人に代わってあげたい気持ちが生まれるのだと聞かせてきました。子どもたちの姿が、自分が満たされて始めて人を思う気持ちが生まれてくる。そんなことを教えてくれたのです。満足するまでです。それは、傲慢なことでも利己主義的なことでも何でもなくて、ごく当たり前のことで、大人は子どもたちのその願いを守らなければと子どもたちを見ていて感じたので

す。

どの保育士も思いやりや人の優しさを育てたいと思っています。けれども、どの位、その子どもの思いが守られていたのか。満足できたのかと思うのです。集団保育の現場だけに、自分はこれまで心の満足をおろそかにしてきたのではないかという気がしてきました。2歳児の子どもたちを見ると、そこを満たすことがなしに、人のことばかりを大切にせよと子どもたちが要求されているということが多くないかと思います。「でも、いくら要求されてもそれは無理だよ、先生、私の思いはいつ大切にしてもらえるの」と子どもたちに言われているような気がしています。この時期には、まず自分が満たされるということが大切でそれが必要ではないかと感じるのです。

10月ぐらいのことです。3歳3カ月のふうちゃんは、第三者の立場でブランコを待つ友達の様子を見ていました。そしてしばらく見ていて、乗りたくて並んでいる子に向かって、第三者の立場からもう「少し乗ったらきちんと替わってくれるから、少し待っててね」と言ったのです。そして、もっと乗っていたい子には、「〇〇ちゃん、もうすこしいっぱい乗りたいのよね、でも〇〇ちゃんが代わって欲しいと言っているのだけれども」と両者の思いを汲み取って言葉にしてくれはじめたのです。私はとてもびっくりしました。ふうちゃんの中にこんな思いが育っているとは思ってもよらなかったからです。子どもって豊かなな、ふうちゃんはどちらの気持ちも分かったのだなと思いました。そして、ふうちゃんのように、自分の思いを汲んでもらった子どもは友だちにもそうし始めるのだなとその言葉を聞き、感動しました。両者ともふうちゃんに自分の気持ちを汲んでもらい、代弁してもらったので、それぞれがふうちゃんの言葉にこっくりと頷き、やんわりムードです。でも、仲裁に入ったふうちゃんは、なかなか替わらない両者を見て、すぐに替わり合ってくれないから「ふうは分からなくなってきた。どっちとも嫌だというのだから」と弱った顔ながらも無理にどちらかを追い込むこともなく、困ってしまった空気の中で子どもたちの時間が流れます。そんな時に子どもってこの世に生まれてまだ3年なのに、友だちのためにこんなにも心をフル回転して、相手の気持ちを考えてくれるのだ。人の中で生きているという感じがすると私も見ていて嬉しくなり、信じていいのだと思いました。何を信じていいのかと感じたのかというと、たった3年しか生きていない幼い子どもと思っていたけれども、この子どもたちの中には確かなものが育っていて、それは大人顔負けのもので、私たち年齢を超えた同志みたい、そんな気持ちになったのです。こんな気持ちになるなんて、本当に不思議です。子どもは小さいから何も分かっていないなんて、そんなことはないのです。

2歳児クラスの春、ブランコにたくさん乗りたがる子どもたちにいっぱい出会います。そんな時は数を数えて交代ではなくて、その子どもの要求をまずは満たしてあげたいと思います。そんな中で子どもたちには、乗れなくて待っている子どもたちの存在も伝えておくようにしておきます。そうすることで、子どもたちの意識の中にいつか時期がくると、葛藤が起こり始めます。相手が待っているからという気持ちと自分ももっと乗りたい、だから意地でも代わらないという気持ちの間で揺れ始めるのです。その揺れが大きくなる一方で、ある時、そのかたくなな気持ちに変化が起こるのです。その時はきっと、その子どもの乗りたい気持ちがほぼ満たされた時ではないか、そんな気がします。自分の気持ちが満たされてくることで、心に余裕が出てきて、相手の存在が見えてくる。すると心を寄せ始める。そ

んな気がします。自分ばかり乗ってはいけない、そんなことぐらい子どもたちは分かっています。でも、どうしても代われないのです。自分の中の何か大切なものを満たさなければ次に進めない。そんな感じが見えています。それを待たずに大人の権威で代わらせることができますが、大人は分かってくれないというそんな不満が納得のいかない気持ちを抱えて反発したり、外見の自分を偽って演じてしまう気がします。貸してはくれるけど、大人はそれを見て、内面に気づかずいい子ねと思っていないかな。これまでの私はそうだったと思います。」

まだ続きますが、この手紙はこの人が40歳を過ぎて、2歳児たちの子どもたちには特に乗りたいという気持ちがあれば、なるべくそれを満たしてあげる。○○ちゃん、次、交代ねと、形式的なことをしてはいけないということ発見したというのです。「本当に満足をした」と満たしてあげると、段々と、自分が育ててもらった喜び、ありがたさを解って、人に対して優しくなっていく。自分がこういうことをしたい、したくないという気持ちをきちんと汲んでもらう。こういうことを重ねると、3歳、4歳になったら、そうはいかないということがたくさん出てくるのが分かって、人に譲ることが自分からできるようになる。それは大人でも子どもでも変わらないのではないかな。子どもを人間として見るということは、子どもには、大人と変わらないその子どもなりの感情、気持ち、心の世界があって、それをできるだけ丁寧に聞き取り、できるだけ満たすという形で対応することによって、段々と自分が何をしたらいいのかを子どもが自分で分かってくる。社会的ルールも分かってくる。そういう意味で、あなたは何がしたいの、何をして欲しかったのと聞きながら、それを満たしていくという応答をすることが、結果として、今日のテーマである子どもを人間として深く見ているということにつながるのではないかなという気がします。

もちろん、これは、1つに過ぎません。加点法で見ることなど現代の育児・保育のテーマはいろいろありますが、ともかく、昔のように皆でわいわいとしながら育てたとか、仕事に巻き込んでいたらいつの間にか育ったということがなくなってきた中で、家庭の中でお母さんが中心になって1人で育てなければいけないという時代には、新たな知恵が必要になっているわけです。その必要を、手練手管的な視点で考えるのではなく、人間や人間を育てるということの原点に戻って考えることが今大事だということをおし上げたつもりです。まとまりのない話になりましたが、ひとまずこのあたりでおいておきます。

一色：汐見先生、どうもありがとうございました。「子どもを人間として見る」ことの基本のお話を伺いました。そういったところから保育というものを考えてみると、また違った格好になるということでした。では、この基調講演に対して、水谷先生からパネリストとして、現場の先生として、お話をいただきます。よろしく願いいたします。

水谷：汐見先生、ありがとうございました。前段の若者の話をお聞きしていて、若者のもう少し先になった成れの果ての大人たちが、今の日本を生産性高く、緻密なもの、精度の高いものを産み出す国に作り上げてきて、日本の一つの誇りにもなっています。それから謙譲の美德とか、謙虚さというのも、外国から来られた方に対して、とても親切だったりなど、そういう良さも一方ではあるわけです。

では、そういうものはどこから生まれてきたのかと思って聞いていました。ただ、今の生産性の高さとか精度の高さは多分、汐見先生の世代ぐらいまでの方が、ジャパニーズビジネスマンとか猛烈という時代に大集団の中で培ってきたもので、今100万人ぐらいしか生まれていないのが、汐見先生の時代には200万人以上生まれていただけですから、(正確には278万人だそうです。)その中で、子どもに培われてきたものというのは、何なのか。この生産性の高さなどは、今後20年後には、本当にそうなのかとは思いましたが、日本人の良さというのはどこにあるのか。

韓国も厳密にいうと違いますが、キリスト教に変わってきていて、儒教精神が薄らいできているので、新しい生産性を生み出してきたことは聞いていたもののあのような客船の事故や地下鉄の事故があったりしました。日本では保育所の保育指針とか幼稚園教育要領を作る時に日本の子どもは一体何が日本の子どもとして課題なのかというのがまずあって、アメリカやヨーロッパの子どもではないし、引きこもりもするという日本の特徴もあって、そういう中でどんな教育要領とか保育指針、ナショナルカリキュラムを作ったらいいのか。とても独特なものがあるのだと思います。連れもっていこうという横並びの日本の習慣や、私は以前、滋賀大学の付属の幼稚園に見学に行った時に5歳児が外で遊んでいる時、男の子はアクティブな子が多いのですが、女の子が6人ぐらい机で色水遊びをしていました。会話は色水あそびとは関係のない、お互いの精神的な抑え合いでした。大人でも対応できなぐらいの強烈なもので、これが女の子の世界なのだと思います。「そんなことを言ったら、もうあんたとは遊ばない」というようなことを言って、相手も負けてなくて、「いいもん」と言ってそれを黙って横で聞いている子どもとか、既にそのような中でもまれていって、近年は学校カースト制と言われたりしますが、もうすでに幼稚園カースト制がそこにあるような感じがしました。

私の幼稚園は入園面接の時にいつもイチゴとバナナとどっちが好きかと聞きます。殆どが3歳児で入ってきます。4月生まれと3月生まれでは大分月齢が違いますが、やはり生真面目な子どもは「イチゴ」ときちんと言いますが、下を向いてしまう子どもとか、少し経ってからお母さんの顔を見る子どもとかそういうのもあれば、もっと違うことを言う子どももいます。例えば「どっちも嫌い」とか、「ぎょうざ」とか言う子もいます。するとお母さんが「やめなさい、園長先生、そんなこと聞いていないでしょ」といいます。私はいつも、「しらない」とか「どっちも嫌い」という子どもは、自分というものをそのまま出せていると感じます。ただ、社会的にいうとそれはよしとして受け入れられない風潮はありますがとても自然体の姿です。

特にお母さんたちは、幼稚園時代からそのような精神的な被せ合いのような人生を送ってきているかもしれない。表づらをうまくして、バス停で幼稚園ママたちはお付き合いをする。そして比較の中でずっと生きているのだろうと思うのです。小さい時から子どもたちもその中で評価され、育ってきているという意味では、わりときちんと考えている園長先生たちは、3年保育はもう遅いだろうというのです。もうその段階ではかなりのレベルまで出来上がっているだろうということです。

私は、入園面接の時には、お母さんにいくつかお伝えします。でもあなたの子どもは3歳です。おもちゃの取り合いなどで「おたくからどうぞと言われたら嬉しいですか、何か抑圧されたように思いませんか」と言います。「僕が先だよ」とか言うと、それが健全だと思うのです。何か顔色を見るというか、幼稚

園の5歳児になると、何か加害者、被害者的なトラブルがあったとします。偶発的だったり、あまり根拠、核心のある行為ではない、たまたまのアクシデントでという時に、その時にすぐに「ごめんね、ごめんね」という5歳児、それは、どこで作られたのだらうと思うのです。そんなに謝らなくていい、「たまたま当たったから、ごめんね」ぐらいでいいと思うのですが、何かの圧力に圧されて自分の出すパフォーマンスが「ごめんね、大丈夫」みたいになる。先生たちが話している時も子どもたちがたくさん周りに子どもたちが集まってきて、報告をしようと思うようです。

私は保育所も運営しているのですが、やはり、幼稚園にある独特の文化であるように思います。保育所にはないとは言いませんが、おとなの支配下に置かれている度合いみたいなものは、やはり幼稚園の方が多くはないかと思うのです。だから、0歳から3歳の時に、汐見先生が決まるということをおっしゃいましたが、それはそうだと思います。けれども、人類の歴史が始まって以来、お母さん1人で子育てをしている率が高くなっていると言われていています。自分1人で育てなければいけないし、そのお母さんがとても心を苦しめているし、周りとうまくしなければならぬというプレッシャーがある。少したんこぶを作っただけで、相手の家にシュークリームを10個持っていきようなお付き合い、そういうお付き合いは幼稚園ではよくあります。それはなぜかという、誰かがシュークリームを持っていったら、次の人はそれが前例になります。誰かが夏休みでお土産を買ってきて、子どもの幼稚園のお友だちにあげたいと言って買ったら、それが習慣化します。何か流されていくようです。これはどう止めたらいいのかは、片方で日本人らしさでうまく全否定せずにやればとても日本人らしいいいものも生まれるのではないかと思います。ただ、それはあまり議論しないし、聞かないので、私の見識が狭く、付き合いも狭いですからもっとどこかでは議論されているかもしれませんから、その辺りは汐見先生に伺いたいと思います。

やはり、お母さんとの関係、今の社会の風潮が孤立した母子カプセルというのは、お母さんの責任ではない。その中で自分というもの、自尊心が育ちにくいのは、本当にあると思います。自分で決めるということも、なかなかできないので、私は入園するお母さんに、できないとか知らないとかわからない食べたたくないなどNOに類する言葉は、私たちは否定的には言わないのです。「食べたたくないと言えましたね」と言ってあげていますと言っています。中には、「食べたくないと言ってもいいの？」と思う子どもがいたり、既に強い規範に包まれていて、そういうことが見られたりします。まして、小学校に進学した時、「先生分かりません、もう一度言ってください」と言った時に「そんなことも分からないのか、馬鹿じゃないか」と誰かに言われたとしても「分からないから聞いているのだ」と言え返せたらいいなと思います。

けれども、なかなかそうにはならないし、黙って軽蔑の視線とか空気が漂うというのは辛いです。そういう中でアイデンティティ、自分を出せる自信は、0歳1歳2歳の時から、肯定的な目で育てるとするのは必要だと思います。けれども、社会全体の中でそれは受け入れられないという大きな課題もありますが、それは私はわかりません。それを根気よく続けていったら日本人らしい良さと自分らしさが両方並び立つのか、両方相容れないものなのかその辺りはわかりません。いずれにせよ、幼稚園の教育の中で自分が感じて、自分が触りたいとかやってみたいと思っていて実際に行動を起こすというこの基本のルールは幼稚園、保育園の中で絶対に大事にしておかないといけないと思います。なぜかという、

パフォーマンスを育てたいから、例えば、強く言い返すということ、それは教える方法はありません。言い返せばいいと言って、そう簡単に言えません。それは教えられない学びの中で、自分から言い返していけるように、自分から友だちと一緒に考える力を持つように、自分から難問にぶつかった時に、どう粘りを持って解決をしていくか。それは本当に教えられないものがテーマとしてたくさんあって、私は保育所の3歳以上、幼稚園の教育要領の五領域の狙いの中には、本当に教えられない狙いばかりがあると思います。自分で獲得しなければならない、好奇心だって教えられませんし、探究心だって教えられません。ディスカッションする力も教えられません。そういうものをどのようにして幼児教育現場で育てていくかという、自分からスタートする、自分の関心から始まる活動を基本にしておかないと、カリキュラムの中の狙いは育たないと思います。知識、技術のように教えることができたり、ビフォー・アフターで評価点をつけたりするようなものは、このようなスクール形式でも一方的に伝えることでもできるかもしれません。九九を教えるとか三角形の面積を出すなどの単元的な教育はできますが、幼稚園教育要領の中にあるものは、とても自発的な活動の中でしか育たない。これは全国の幼稚園の中でしなければならぬことだと思います。

最後に、一言、そういうあるべき姿を汐見先生に語っていただきましたので、私もたくさんありますが、園長先生が変わらないと変わりません。これから、幼児教育現場に入っていく学生さんがたくさんいますが、そこは教育の考え方とか価値観で教え込んだ方が大事であるという人はいます。私は、絵画の先生と意見が合わず辞めていただきました。その先生は、まず、筆の使い方とかのりの使い方を教えるべき、絵の描き方まで教える。だから同じような絵ばかりになる。ですから、その先生のやり方が気に入らぬと言うと、技術がないと表現はできないとおっしゃいました。それより自分の感性、どのように表したいのが大事で、技術は後でいいと思いました。そういう先生が園長先生はたくさんいます。そんな先生に対して、誰が変わってもらおうように言うのか。どう働きかけていくのか。これからも現場の先生たちは、本当に自分が信じる幼児教育が段々と見えてきているのだけれども、自分の現場で、本当に実践できないと、全然意味がないです。そこのアプローチも、もう少し外的な力とかシステム、一つは公的な評価があればいいのですが、これは一律教育になってしまいますので、これも難しい。そのようなことを思いながら、お話を伺いました。ありがとうございました。

一色：汐見先生、水谷先生のお話は、現場から今、具体的にいろいろなことが起こっているということがありましたが、その辺りについてはどうでしょうか。

汐見：ありがとうございました。私は話題提供させてもらいましたが、個人的にはいろいろなことを考えなければならないと思っています。確かに、日本の若者の自尊感情のデータはとても低いです。では、アメリカみたいな数字になればいいのかということ、私はそうではないと思っています。要するに、日本人の良さとか日本らしさというのは一体何なのか。そのことについて考えてこなかった教育に責任を感じているということです。例えば、気持ちを察しなさいということを小さい時から言われます。そういう察しの文化であるとか、相手のことを考えて行動しなさい

ということがよく言われますが、それは決して悪いことではないと思います。ただ、それを日本的な集団主義という形で、自分を殺してしまうというのでは、今はまずいわけです。相手の気持ちを察した上で、自分のことを主張する、ともかく自分を主張しなさいという文化ではなくて、自分も主張するけれども、相手の気持ちも察しなさいというバランスの中で自分を考えていく。これが日本人が大事にしてきたことを現代的に生かす方法だと思っています。実際、アメリカでは何でも褒めて育てすぎたので、若者の中には、傲慢になりすぎて困るという人や、本当は自分はダメだからこんなに褒められるのではないかと疑っている若者が出てきて、これまでのアメリカ流の教育、育児を反省すべきだという意見も出てきているそうです。

先ほどの保育士さんの文章は、微妙なあやのところが悩みながらやっている。だから、0歳1歳2歳の時ぐらいいまでに、なるべく自分を出させてあげないといけな。でもそれは、きちんと聞いているよという関係の中でのことです。そうすると3歳4歳となれば、出すのはいいけれども、他者の気持ちを察することも大事という察し方が身につくということの実証ですよ。

もう一つ、これからは大事だと思われる文化があります。それは、皆で相談する、討議するという文化です。このようなことは、かつてはもっとあったと思います。田舎の方に行くと、お父さんたちはいつも仕事が終わったら長者さんのところに集まっては、ちびちび飲みながらいろいろな話をしていたという文化があった。でも最近では、そういうのがどんどんなくなっている。子どもたちがいろいろ討論し合うことをあまりしなくなってきたということは平行していると思うのですが、かつては、人の気持ちを察すること、自分を主張することのバランスを考えてやりなさいという日本文化があったと思います。それが、先ほどのデータがアメリカなどに比べて低く出てくる理由だと思うのですが、それにしても低すぎるということです。バランスを欠いてしまっている。そこに何か今の私たちの育て方の問題があったのではないかと思うのです。

このようなことを考え始めたのが、東京大学にいた時に、ゼミに出させて欲しいと30代の女性が多くなったときでした。なぜかと尋ねると、自分が苦しいとか、死ぬことばかり考えているとか、今まで育ててくれた母親が憎くてたまらなくなつてそういう自分が嫌で仕方がないなど、苦しんでいるというのです。そういう女性がたくさん私のところに来るようになったのです。心理学とかカウンセリングの勉強をしたいというのですが、人のためではなくて、自分のためにやりたいと思っている人ですね。ゼミには出ていいといって自由に出てもらっていたのですが、一時は30代の社会人がたくさんゼミになったこともあります。

その時の言葉では、アダルトチルドレンという感じの人たちだということが分かってきたのですが、やはり、自分を主張することと気持ちを察して社会に合わせることとのバランスを欠いてきた人だと思っています。だから、自分のことを主張できないまま育ってしまうと、大人になってこんな病気になってしまうということに気がついたんですね。

きちんと自分を受けとめてもらって主張するということを小さい時から丁寧に育てて育つことの大事さですね、それを保障されて育つと、今度は他者を受けとめ他者の主張を聞くようになる。それが察するという行為がうまれるメカニズムのひとつですが、そうして自分を主張しながら人のことを察する

ことが大事であるということを学ばせていくような、そういう育て方をしなければならぬのに、学校に行けば、現実には逆になっている可能性があります。先生は正しい人、そのやり方をきちんと覚えなさい。きちんと覚えた人は点数が高いという形が特にそうですね。正しいことはあなたの頭の中に萌芽的にあるのだから、それを形にしてごらんという教育ではなくて、正しいことは先生の頭にあるので、その通りやり覚えなさいという教育が相変わらず多い。

日本には、日本独特のいい文化がたくさんあるんです。それが日本人のきっちりさとか器用さとかを生み出している。ある国で、日本の商品が質が高いのは、日本の子どもたちは小さい時から手先が器用になるような遊びをたくさんしているからだ。例えば、折り紙をみんな折っているが、この折り紙を折るということが日本人の器用さ、几帳面さの基盤になっていて、それが経済繁栄に繋がっているという分析をしました。それで、自分たちの国の子どもたちにも折り紙をさせようと、学校のカリキュラムに折り紙の時間を入れているところがあるとか、町ぐるみで折り紙のコンクールをしているところがあるという国があるのですが、ご存知ですか。ロシアです。言われるほど、日本の子どもは折り紙などしていませんけど、そのように注目している国もあるくらい、日本の文化には、外国人もうらやむような優れたものがたくさんあります。

でも残念ながら戦後教育では、日本の伝統的な文化の中で、これはいいものだ、大事な文化だというものをきちんとピックアップして、それを今風に洗練していこうという教育はしてこなかったんですね。戦前は、ある意味全部否定すべき対象だった感じです。戦前は、民主主義もなかった、文化主義もなかった、人権主義もなかった。だからそれを欧米から学んで、それを取り入れていくというのが戦後教育という感じですね、それを近代化のための教育といってもいいのですが、近代化とはすなわち欧米化のことで、日本にはなかった近代的価値を上手に輸入しようとするのが戦後教育だった感じです。ともかく「ない」から出発する教育だったのです。そういうことを認めると、それだけでよかったのかという視点から、学校教育のあり方を全部一度見直しをしていかねばならなくなってくると思います。特に「近代」が問われている時代ですから、余計にそういう気がします。明治の初めはもっとその傾向があった。「ない」から出発することは、裏を返すとコンプレックスから出発することです。同じ論理が、個人にあてはめられるとさっき言ったような、できないことをできるようにするという教育、「ない」から出発する教育になります。子どもはこれができないからできるようにしてあげようという教育。これはないから出発する教育論であり発達論です。それだけではない、子どもは既にいろいろなことができる可能性を持っている。それを子どもたちはいろいろな形で表現しながら洗練していく。それをきちんと受けとめて、それをできるだけ個性的な形に洗練していけるように、上手に応答してあげよう。「ある」から出発するような教育や保育も大事にしよう。

「ある」から出発するという教育。私たちは、そういうものをもっと大事にしていかないと自尊感情に現れているデータを皆が納得するような形で解決していくプランはなかなか見つからないと思っています。

一色：ありがとうございました。もう一つだけ、伺います。先ほど水谷先生のお話に出ましたが、

保育指針、教育要領の中でも教えられないものがあり、汐見先生がお話になった、0歳から2歳の子どもたちは自分の方からというのは中々むずかしい、文部科学省とか厚生労働省の中にも何も入っていないのではないか、その辺りはどのようにお考えでしょうか。

汐見：その通りだと思います。私の個人的な考えを言いますと、この間の新システムのところから新制度まで、国をあげていろいろと議論してきました。今、世界中の国々、特に先進国といわれてきた国々で、子どもが「生活」の中だけではうまく育たなくなっている、にもかかわらず子どもたちが大きくなる社会は難題がたくさん待ち構えている。だから、教育水準を上げていくことでこれを切り抜けていこう、こうした施策を採り始めています。それが教育重視策なのですが、その教育をいつからしたらいいのか。あれこれ調査が行われ、結局0歳からするのが一番効果が高いというデータがたくさん出てきたわけです。そのために、今、ヨーロッパの各国が幼児教育にもっとお金をかけて質のアップを、と言っています。けれども、日本のこの前の民主党の時からの新システムの議論の中に、何のためにこれをするのかという議論はほとんどなかったのです。たとえば日本の社会を上手に地球と共存できる持続可能にしていくための人材を育てるためには、今までの教育の質を変え、それを丁寧にしていかなければならない。あるいは格差が広がっている社会の中で、下に落ちこぼされてしまう子どもたちの底上げをしていかないといけない。などなどですが、そのためにこそ、丁寧な幼児教育、保育をしなければならない、そういう議論は殆どされていないのです。

つまり、何のために質を上げないといけないのかという議論をほとんどしてなくて、待機児が中々解消しないので何とかしなければならぬという議論をしてきたわけです。

待機児というのは、周知のように0歳1歳2歳が多いのです。だから、それを解消するために、これまでも、保育園の定員を水増しして欲しい。25%まで増やして欲しいとか、もっと30%まで増やして欲しいなどと、国は言ってきましたが、結局それは、乳児保育の環境を悪化させることに繋がってしまいます。問題は、そんなことをしたら子どもがうまく育たないと国は考えなかったことです。なぜか。厚生労働省は病気についての知識はあっても、子どもの育ち、教育についての専門家は誰もいない機関だからだと思います。

私はこの間の議論の最大の弱点は、子どもをもっと深いところから育てないといけないから、環境をもっとよくしなければいけない。先生方にももっと勉強してもらわないといけない。もっといろいろな学問と結びついていかないといけない、等々の議論を飛ばしたところで、数をどうするか、お金をどう配るかということばかりを議論していたために、肝心の中身が薄まっていったという感じがしています。保育指針は、幼稚園の教育要領を作っている人たちも関わって作りました。保育指針の中の三章「保育の内容」は幼稚園教育要領をコピーペーストしているだけです。幼稚園と保育所の保育内容は同じにするというのは、1963年の文部省と厚生省が共同通達以来、そうなっています。幼保一体化はできないから保育内容を一体化しましょうということで作りました。それはそれでいいのですが、幼稚園の教育要領はあくまでも幼児なのです。保育所の対象は乳児もいます。赤ちゃんの保育指針と3歳から5歳の子ども保育内容は同じではないと思うのです。もちろん基本的な考えでは共通する部分がないとは

いけません。

つまり、0歳1歳2歳の子どものための特別の丁寧な保育指針は、作られていないということです。乳児については個別の計画を作らなければならないとは書かれています。でも、子どものちょっとした仕草をどう受け止めていくのか、2歳児の難しい時期について、形だけを追ってはいけない等の乳児保育独特の難しさ、大事さについては特に書かれていません。だから現場ではそれぞれに受け止めていくわけです。園によって乳児保育は正直バラバラです。ここは何としても改善しなければいけないと思っています。

一色:ありがとうございます。学生の皆さんの中でも保育士になったり、幼稚園教諭になったり、小学校教諭になることを考えている人もたくさんいると思います。学生の方で何か質問や意見などありますか。

学生 A:お母さんも子どもにそういう教育をしたいと思う人もいると思いますが、周りがきちんと子どもが大人しくしていないと迷惑がかかるとか周りの目も気にします。そういう時は、どのようにすればいいのでしょうか。母親もそうしたいけどできないという葛藤があると思います。

水谷:母親の考え方を少し切り替えることが必要だと思います。私は3人子どもを育てました。1人産まれるごとに懲役3年だと妻と言っていました。フォーマルなレストランに行っても落ちついて食事できないし、そういう意味では、子どもが制約なく自由に動けるような環境で育てるしか仕方がないと思います。3人いたら、2歳違いだったら10年近く、親子で出かけるのに適しているところと適していないところを分けてしないとイケないけれども、今の若い世代のお母さん、お父さんは、大人のフォーマルな場所とか、私は、甲子園球場とかサッカーを観戦するものいいですが、本当に子どもたちが1時間2時間ゲームを見ていたいのか。自分で行くのはいいですが、子どもは誰かに預けていけばいいと思います。子どもが自分らしくという時に、3歳、4歳で甲子園球場には行かないと思います。そういう意味では、生活のあり様を自分シフトにし過ぎていると思います。

汐見:私は、例えば、電車の1両は親子連れ専用にするなどの社会の配慮が足りないと思います。お母さんが行き詰まるから、子どもを連れてレストランに行きたいとかというのは解らないでもないですが、私は、いくら赤ちゃんでも、公共の場で他人に迷惑をかける権利はないと思っています。だから、子どもが小さい時に、わーわー泣いた時には、配慮して子どもはそんなもんだと周りは言ってあげてほしいのですが、泣き始めたら電車を降りるべきだと思っています。

私も子どもは3人いて、子どもはレストランに行きたいわけではないと思ったので、土日は全部自然の中に連れ出しました。子どもはその方が良く育つと思ったのです。私は品川に住んでいましたが、保育園の友だちも一緒に自然の中に連れて行くのを続けました。そういう形で、お母さんやお父さんが、子どもが小さい時には、こういうことができますというアイデアや子どもがうるさくしても大丈夫だという所

を作ってあげるようにしないと、いろいろな人がいる前で小さい子どもを連れていくのは、それは叱らざるを得ない。そうなると、連れて行くのが嫌になって、子どもに厳しくなって、子どもの方も何でこんなところで叱られるのか解らなくなってしまうという悪循環になってしまいます。そういう意味で、日本の社会は、まだ子どもを育てる時に必要なツールとか場をもっといろいろな形で編み出すということがまだまだこれからなんだと思います。

親もそういう知恵を皆で交換することをしないと、いろいろな人がいる場合は、小さい子どもを連れて行って迷惑をかけたくないというのは当然ですから、その辺りをもっと考えないといけないと思います。

一色：どうもありがとうございました。汐見先生はヨーロッパに行かれていて、ヨーロッパでも大人がしっかりとしている部分と子どもが自分の思いでできそうな場所があったりしますが、日本はないですね。原っぱのような子どもが遊べるようなところもあります。そういうところは、日本の社会として新しく次の世代に都市計画を作らなければいけないのではないのでしょうか。

汐見：3.11の後、私は子ども環境学会という学会で、再建、復興する計画を作る時にここに住むのは、今の子どもたちなのだから、再建、復興計画の会議に必ず子どもの代表を入れてください。必ず彼らの要望を聞いてくださいと言って廻ったのですが、それを聞き入れてくれたのは少ししかありませんでした。日本の中で子どもを人間としてみるという発想は弱いんです。例えば、若者が自由に活動ができる場所は殆どありません。以前、私は、立川市で街づくりのプランを立てた時に、駅前に若者がスケートボードができるような大きな広場を作ろうというと、一笑に付されたという感じでした。でも町の中心に若者が何かできるような場所を作るとか、ベビーカーで来たお母さんがのびのびできる場所を作ろうとか、おじいさんおばあさんと一緒に若いお母さんたち、世代間で交流できるようなコミュニティカフェを作ろうと言いました。そういう子どもたちを大事にした拠点づくりが始まったばかりで、自治体でかなり差があります。本当にこれからだと思っています。

一色：では、ここで第一部は終了いたします。

< 第二部 >

一色：第二部を始めます。今日は、たくさんの地域の方と神戸市私立保育園連盟に参加されている保育士の方々、園長先生の方々がいらっしやっていますので、今日のテーマについて議論していきたいと思います。皆さんから今日の話聞いて、何かご質問をいただいてディスカッションしていきたいと思います。

拳手をお願いできますでしょうか。

一般A：子どもたちのやりたいことを尊重して、日々の姿を大切に、次の日に前日のことが繋がるよ

うにいろいろ考えながら、教材研究をしたり、机の設置を変えたりして、子どもたちに昨日していたことがより続けられるように環境配置をしたりというのをやっていくべきだと考えているのですが、一方でこれだけのことをすると中々保育士の先生というのは、今後もっと預かってくれと言われていたりして、難しくどンドンと手が廻らなくなっている状況があります。このような状態では、子どもたちの意思を受け取ろうとしたら、逆に人手が足りなくて、この子の意思を尊重している間に他の子どもを放置してしまう、保育というより放育になってしまうかということを懸念しています。どうすればいいのでしょうか。

汐見：例えば、東京で言いますと目黒区立碑文谷保育園という保育園があります。今、見学者が絶えません。ここでは先生が引っ張っていく保育は一切止めようということで、子ども中心の保育にきり変えたら、見事に子どもが集中するようになって有名になっているところです。きっかけは、高級住宅地のど真真中に保育園があるので、そんなに大きな土地はとれません。周りに迷惑をかけないようにしているはずなんですが、とにかく保育中の先生の声がとてもうるさい。異動してきた園長がびっくりするのです。近所の家に挨拶にまわると案の定、子どもの声は我慢ができるけれども、なぜ、先生の声があんなに大きいのかという苦情が入ったのです。そこで園長は実際にビデオを撮って見せてみた。すると確かに自分たちの声がとてもうるさいことに気がつくわけです。なぜ、そんなに大きいのかというと、園庭に何も置いていないから、毎日皆を集めて、「今日は大縄跳びをするよ」とか「今日は跳び箱やるよ」とか言って、先生が引っ張っていく。すべて先生が指示をするので、指示に従わない子どもに対して声が大きくなる。子どもは自分がやりたいことをやっているとは限りませんから、乗って来ない子どもも多い。そうなるともって声が大きくなる、こいういう悪循環になっていたことに気がつくわけです。こんな保育が私たちのやりたい保育なのか、園長はそう聞き、「あなたは子どもにどのようになって欲しいのか」「どのように子どもを育てたいと思って保育しているのか」というところから議論を始めて行きました。それから自分が子どもの頃に遊んだ遊びで本当に楽しかった遊びを上げて見て、そしてそれは今の子どもたちができているか考えてみて、などと進んでいきました。アンケートを採ると、先生たちが子どもの頃楽しかった遊びというのは、全部、今の園では禁止している遊びだったことが分かりました。

そこで、遊びの専門家に来てもらったり、いろいろな園を見学に行ったりしてみると、要するに、遊びというのは、自発的でないと遊びではない。自分で選んでやって、自分で試して、自分で失敗をするのが、遊びなのだ。そのためには、50人がいたら、50人が遊べるだけのツールがいる。でも今の園には何も無い。そこで、可動遊具をできるだけ増やしてみようという努力が始まったのです。また、木にいろいろな紐や棒をぶら下げるとか、使われていない鉄棒にハンモックをテントみたいに張ってあげるとか、タイヤを100本ぐらい買ってきておいておくとか、お風呂マットを50枚ぐらい置いておくとか、木の切り株をもらっておいおくとか、ドラム缶、ビールケース等、可動遊具となるものはできるだけお金をかけないで導入したのです。そして原則は、一切の指示語、命令後、禁止語、否定語は言わない。「危ない」などは絶対言わない。そうして自由に遊ばせるという保育を始めました。危ないときに「危ない！」と言うとその瞬間にケガをするから、そういう時には、そばにいて、黙ってさっと支えてあげるだけにする。そういう保育を始めたのです。

すると、子どもたちは段々と分かってきて、とても面白い遊びをし始めた。昨日はここまでしたので、今日はここからやろうとか、タイヤなどは全部自分たちで運んできて積み上げていって、上にある吊り輪にタイヤに乗ってぶら下がろうとか、実にいろいろな遊びを編み出していくのです。何をしてもそばまでは行くけれども、言葉も手も出しません。少しくらい転んでも手を出さない。

すると、子どもたちはどんどんと大きな失敗をしなくなるようになっていきました。保育士さんの観察では、子どもは自分の能力の限界を知っている。だから、10が出来る時は11,12のことを挑むけれども、15,16のことには絶対に挑まない。そのことをきちんとやっていないから15,16に挑んで怪我をするということがわかってきた。そういうことをやって、毎日外で遊ぶのが楽しくて仕方がないという感じで、一切園庭では先生の声が聞こえない保育園になったのです。聞こえるのは、子どもたちが遊んでいる時の声だけです。遊びでも何でも、熱中すると人間というのは声を出さない。その保育園は静かになったけれども、子どもたちはみな元気に遊んでいる。そして気がつけば3年間、事故がゼロ、一切事故がない、怪我がないという保育になりました。子どもがダイナミックな遊びができるようになって、運動能力、身体能力も見事に伸びる。先生方がとても細かく子どもを見るようになった。〇〇ちゃん、あの遊びが苦手だけれども、そこにこのようなものを置いてあげればいいのではないかと、もっと年下の子どもと一緒に組みあわせればいいのではないかとか、いろいろなことを話し合うようになって、多分、今の公立保育園では、皆がこうすればできるのだというモデルになっている。今見学が絶えない保育園です。東京でいうと、江東区などの保育園が全部これに変えようと始まりました。

ですから、保育のやり方の工夫次第で、ある程度、今の問題はクリアできるのではないかと思います。それと、先生がひたすら、子どもの写真を撮ったりして子どもたちのことを記録していき、今日はこのようなことをやったとか、これが生きてこのようなことができるようになったなど、子どもの遊びの中での育ちを記述してドキュメントにしていく。それを今度は帰ってきたお母さんたちに毎日見せていく。そういうことをしているところも増えてきました。今はデジタルカメラという便利なものがありますし、携帯電話のレコーダーがありますので、活動の記録が克明にされるようになってきて、コミュニケーションの仕方が革命的に変化してきています。ドキュメンテーションと言っていますが、そうした記録が作れるかどうかで子どもが見える保育をしているかどうか分かるようになってきたとも言えると思います。

一色：ありがとうございました。前編のところでは、具体的な保育についてはあまり話ができませんでしたので、保育のところのいろいろな問題があると思いますが、その辺り、保育関係の先生方、そしてこれから資格を取ろうとしている学生の方々、挙手してください。どなたかいらっしゃいますか。

一般B：貴重なお話をありがとうございました。今、この大学の4年生で森の幼稚園でボランティアをしています。昨年の全国フォーラムで、汐見先生がお話をされていて、今日の講演をとても楽しみにしておりました。

先ほどのお話の中で、生まれることを選べないけれどもその後は全部選びなさいとおっしゃっていま

したが、例えば、遊びにしろ習い事にしろ、この中から選んでというのは、最初の一步は親が提供するしかないと思うのですが、その後、少しやってみて、すぐにこれは違うとなって、その見極め、やりたいのかもしくは続けるのが嫌なのかの見極めをどうしていったらいいのか疑問なので、是非その点を教えていただきたいと思います。

汐見：子どもがどんなことをしたいかというのは、もちろん、子どもの個人的な性格の差もありますが、大人の方がたぶん、この年齢であれば、この子どもはこのようなことをして遊びたいのではないかとおもちゃを置いてあげるとか、部屋をそのような環境をしてあげる。私は、子どもがはいはいをした時、ソファなどをなくして、はいはいができるように広くするとか、そういうようなことで、いろいろと環境を用意します。

それで遊んでいるけれども、どうもあまりいい顔をして遊んでいない。この子はどうも大人が使っている道具で遊ぶのが好きだとか、いろいろわかってきます。そういうことを通じて、子どもの声を聞くとか、子どもの願いやか本当にやりたいことはこれなのだと聞き取る。それならば、こちらにしないとか言う。

たとえば子どもは、穴を開けるのが好きです。私も子どもの時によくやっていた。放っていたら、襖をにどんどん穴を開けて行って、襖1枚、穴を開けて、紙がなくなってしまったこともあった。要するに、今やりたいことをできるだけ、保障してあげて、危ないものをどけておく。そういうことから始めていく。でも、やがて、これはやってはいけないということがでてきます。それは、丁寧に子どもの目を見て駄目だよと教えないといけない。それも社会のルールがあって、その社会のルールに従って、自分が自由になれるということについては、教えてあげないといけないし、守らせていかなければならない。人の家に行って大きな声を出して遊んではいけないということも、もし、それをここでするのであれば、もうここには連れて来れないという形にするなどする。

でも、遊びについて、何をやりたいかについては、さまざまところに連れて行ってみたり、やってみて、この子どもはこういうことが好きなのだとということを見つけて、それに応えてあげる、そういうことを丁寧に繰り返していくしかないのではないのでしょうか。

それでも、聞き入れない。子どもは本当は別のことが好きで、違うことを思っていたということはたくさんあると思います。ただ、私たちの責務としては、聞いて、応えてあげるとというのが、基本スタンスだと思います。

森などの自然の中にはぜひ連れて行ってあげてほしいですね。自然の中では、地面はでこぼこしているし、人間の都合にあわせてできていなものだらけです。それに子どもの身体がきちんと合わせられることによって、身体がしなやかになっていく。真平らな地面ばかりを歩いていても、身体はしなやかになりません。それから自然の中には、子どもにとっては「えっ」と思うことがたくさんあります。しかも、寒い時には寒い風が吹いている。匂いがある。五感をすべて使わないと生活ができない。五感を使うということは、人間の身体の中にあるいろいろなものを活性化させてくれて、そこから脳が働き出す。

だから、自然の中でいろいろなことをした方が身体いろいろなことをわかっていくというのを訓練できるのではないかと考えています。

私は子どもが5歳の時に、満天の星空が見える山に連れて行って、そこで宿泊したことがあるのですが、そのときわが子どもいった言葉を覚えています。「うわー、すごい。こわいー」と言ったのです。満天の星がこわい。こわいと言いながら、でもずっと見ていました。素敵な言葉だと思いました。そういうものは自然の中に連れて行かないと味わえないです。風が吹いた時に森がなびくのは、まるで風の神様が息をしているような感じがするのです。森の中には命があるという感じがする。そういうのは、やはりそういう所に行かないといけない。だから必死になって連れていきました。

私は人間はどんなに進歩しても自然と関わることで、人間になっていくということは避けられないと思います。ですから森の幼稚園などは応援しています。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般C：今日は貴重なお話をありがとうございました。私は保育士でも学生でもありません。1歳半の子どもを持つ母親です。毎回、すくすく子育てを見ているので、今日は楽しみに伺いました。

先ほど、汐見先生のお話の中で、子どもの気持ちと自己決定にできるだけ寄り添うといいというお話でしたが、私自身、4月から職場復帰をし、1歳半の子どもを保育園に預けて働いている毎日の中で、子どもがまだまだ母親と一緒に過ごしたいという思いがあるのではないかと感じてはいますが、中々それに対し思いを聞き入れられないという感じています。その中で、一緒に過ごしてあげるという選択が一番いいと思っはいますが、そういうこともできないので、申し訳なさを感じてしまうのですが、その申し訳なさを子どもにぶつくと、どんどん悪循環にはまっていってしまう気もするので、毎朝笑顔で元気に行ってらっしゃいと送り出すのが精一杯だと思っいて、その中でどう保育園と向き合っていくのがいいのかが分からない部分があり、教えていただきたいと思っいます。

汐見：面白い人がいます。かつてテレビのディレクターをしていた女性で、上の女の子の時は、まだ保育制度も十分ではない時代だったのかもしれませんが、夜、仕事に出かけないといけない時に子どもをおばあちゃんに預けていく。それで子どもがとても欲求不満になってきたような気がするということで、親子とも我慢の連続で、でも仕事はやりたいということで、やってきたら、やはり、自分も耐えられなくなってきたのか、下の子どもさんが生まれると解ったときに、多分、日本の女性テレビディレクターで第1号の人なのですが、思い切って仕事を辞めたのです。

2人目の男の子に対しては、一生懸命上の女の子にできなかったことをやってあげようと、子どもとの時間を増やしてやったのですが、結果としては、下の男の子がうまく育たないのです。そして不登園児になったりしました。それから教育評論家のような仕事を始めるのです。

彼女自身がわかったことは、下の子どもに時に、本当は仕事を続けたくて仕方がない、でもそれを我慢してあなたのためにしているのだからという気持ちを子どもの中に伝えてしまった。つまり自分の本

音と建前が違う。本当は、お母さんは外で仕事をして、ごめんねと言いながら、仕事を澁刺としているお母さんの方が、子どもは嬉しいのです。自分のために我慢しているのを押し付けられては、子どもはたまらない。だから、データでは、子どもと接する時間が多いお母さんの方がよく育って、少ない方が育たないというデータはないのです。質の問題なのです。

ですから、私は保育園に預けて、あなたがそこにおいて、生活できるからありがとう、その代わりお母さんは頑張るねと言って、そして戻ってきたらある意味べたべたしてもいいですから、これからはあなたの時間だよと言って、精神的に澁刺としている、それが一番ありがたいのです。何か嫌々働いているとか私のために犠牲になっているというところを見せられたら、子どもは精神的に辛いです。そういう意味で、気持ちはよく分かるし、とても大事なことを仰っていると思います。やはり子どものためには、お母さんが働く時には、それを喜びと思って頑張っているいいことしているので、「ありがとうね」と子どもに言いながら、澁刺とした姿を是非見せてあげて欲しいです。そうすると、きちんと育ちます。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般D：大阪から参りました。汐見先生に伺いたいのですが、子どもが幼稚園、保育所を卒園し、小学校に上がった時に、小学校1・2年生問題といえますか、学級崩壊を起こす例がよくあります。これは、アメリカ辺りのものが日本に入ってきたのか、アメリカ辺りはそのようなものは無いのか、その辺りを教えていただきたいです。

汐見：この前書いた本がそれなのです。「本当は怖い小学一年生」をポプラ新書から出しました。これは、なぜ小1プログラムが起こるのかと今まではそのように言われてきたけれども、本当は違うのではないかということで書いた本です。

幼稚園や保育所がきちんと子どもに自由ばかりさせて、躰けることをしなかったからだとされてきました。或いは、家庭の教育能力が弱くなってきたらからではないかと言われてきた。そうではない考え方で、要するに子どもたちは、情報だけだったら簡単に絵本などが入る時代に生きていて、本当の手応えや知る喜びを味わえなくなっている。本当はもっと知る喜びや分かった感動などをもっと欲しいと思っているのではないか。要するに生活の中でこれは自分が作ったのだ、これが生きる喜びなんだ、というのが、どんどん少なくなっている。だから、学校に行くとそういう学びの喜びが欲しいと思っているのに、相変わらず、机に座ってずっとドリルをさせられる。

私の息子は1年生のとき、計算の宿題を持って帰ってきてもしたがりませんでした。なぜしないのかと聞いたら、「お父さんもお母さんも自分で計算なんて何もしていない。計算機でやっているのに、なぜ僕らだけしないといけないのだ」と言ったのです。その疑問を聞いた時になるほどと思いました。子どもは、やはり親を見ていて、これが必要だなということを感じて勉強するのですね。逆に親がしなくなっているのに、なぜ、このようなことを僕らだけしなければならぬのかと思っているわけで、考えてみれば正当な反応なんですね。よくわかります。子どもたちは、いろいろと情報が入ってくるけれども、

これは本当に自分で調べたことだとか、皆でいろいろしてやっぱりそうだったのだというような解る喜びみたいなものを欲しいという時代になってきたのに、学校は古い時代のやり方を相変わらずしている。それが嫌だというのが、子どもの本音ではないか。だから立ち歩くのではないか。

では、外国ではそのようなことがあるのかと調べると、ないのですね。小1プログラムで困っているのは、日本の特徴です。アメリカなどの小学校1年生は皆、輪になってやったり、皆で調べにいこうというような授業が多いのです。だから、日本でも、虫について調べてみようみたいな授業に切り替えていったら、子どもたちは調べるのはおもしろいとか、何々ちゃんの発表はいつもイラスト入りで面白いねとなると、学校というところは楽しい所だとなって、そして段々と、でもこういうことも覚えなないといけない、調べなくてはいけなくなるとなると、知的な能力を高めていくのだと思います。そういう意味で、実は、幼稚園や保育園でやっているような探求型の活動を学校でももっとやった方がうまく行くとほくは思っています。

この本では、そこから始まって、今、子どもは、情報を知るツールや媒体はたくさんあって、上手にそれを活用すれば、我々が驚くぐらいの能力を発揮する時代ということも書いています。子役の芦田愛菜ちゃんを見てください。少し前までいかなかったような子がたくさん育っています。この前に卓球で優勝した子は13歳です。だから、上手な出会いをして、その子どもをうまく伸ばしていくと、我々が驚くほどの力を発揮する。そういう可能性を深く信じて、子どもを子ども扱いたくない。今までの学校は、平等を大事にしてきたけれども個性をもっと伸ばすことはあまりできませんでした。これからは、平等な授業は午前中、午後は、それぞれの子どもの好きなことをたくさんさせるような学校に変えていこうという提案もしています。そのために、算数が好きな小学生は、高校大学までの数学を教えてあげてもいい、将棋が好きな子どもには将棋を教えてあげる、そのような学校に変えていきましょうということも含めています。要するに、章1プロブレムは日本の教育の課題を見せてくれている現象だということです。

一色：では次の方どうぞ。

一般E：私は保育、幼稚園の関係で経験があったわけではないのですが、行政の方で子育て支援の仕事をしていた関連もあり、退職いたしました。社会の子育てをしているお母さん方に対する社会の目が最近変わってきておりまして、そういう点で、2つ事例を挙げて、ご意見を聞けたらと思います。

1つは、新聞にもよく出ていましたが、電車の中でお母さんがバギーに赤ちゃんを乗せてそのまま乗ってくる。すると広いスペースが必要ですし、ラッシュアワーの時などは邪魔になるということで、それは迷惑だという意見とそうではなくて、子育て中のお母さんは、どうしても乗らないといけないう必要性があって電車に乗っているのだから、そういう人を暖かい目で見、しかも、豊んで乗りなさいということになれば、片方に赤ちゃんを抱えないといけないう。そして、片方にバギーを持たないといけないう。そうなる揺れる電車の中では危ない。そういう部分は理解してくださいという意見とかなり議論がありました。そんな中、鉄道会社の方もどちらの表示をしたらいいのか、理解をしてくださいというのとラッシュ

アワーの時は赤ちゃんの連れて乗るのはご遠慮くださいとするのか、かなり揺れていて、最終的にはご理解をお願いしますという表示に変わってきている鉄道会社が多いように思います。それが1点と、もう1つは、日本航空の飛行機に乗った赤ちゃんを連れてお母さんが途中で赤ちゃんがとても泣き出して、どうしても泣き止まなかった。同じ飛行機にたまたま乗っていた有名な漫画家の方が、ベルトを外して、そのお母さんの横に行って、どうしてこんなに泣き叫ぶ赤ちゃんを飛行機に乗せたのかということで、お母さんに抗議してもなかなか収まらなかったの、飛行機が到着してから日本航空の会社にも抗議をした。赤ちゃんを乗せるな、乗せるとしても、別室を用意するなどしなさいという現実にとぐわいな話がありました。

そのような中で、社会の子育てに対する目というのが、やはり何か自分もいつかはあったはずだけれども、のどもと過ぎれば暑さ忘れるで、自分にとって迷惑な部分はどうしても相手を責めたり、相手を許すというのが今の日本人の社会の中に段々となくなってきたのではないかと思います。

一方で私も、孫がいたりして、今のお母さんは、子どもを育てると思ったら、私も気がつきませんでした。予防接種などでめすごい回数で行かないといけない。そうすると、どうしても電車に乗らないといけない。そうすると、いろいろな社会の目でそういうことをいろいろ突き詰められてくると、子どもは1人でいいわと、2人、3人もいらなくなってきたら、とても悲しいことだと思います。

この2つの事例について、ご意見をいただけたらと思います。

水谷：ケースバイケースだと思いますから、周りの共感性があるような人がいれば、もちろん、バギーを畳まなくても乗れるのだと思いますが、現実問題は状況判断をするしかなくて、やはり自己主張が強い周囲の方、袋小路の新興住宅街で、花火やローラースケートをしていたら、終の棲家として、この家を買った私にしてみたら騒音でしかない、回覧板で、ローラースケートは禁止となってしまう、若い夫婦のご家族にとっては、住みづらい。そういうのは、その時その時に一定の配慮を実際にしないと、マンションでも2階のジャンプをした音が下に漏れるということであれば、2階のおじさんがうるさいから静かにしなさいとなります。ですから、一辺倒な結論は無理だと思います。

社会の認知とか理解は、それは外国に行けば行ったで、別の価値観で受け入れあうとかその国の歴史伝統があると思いますが、今の日本はその時の判断をするしかないと思います。妙案が思い浮かびません。一緒に考えないといけませんねとしか言えません。

汐見：先ほども言いましたが、電車の中でこの車両だけは、どうしてもベビーカーを畳めない人ここに乗るよという優先席を作って欲しいということがあって、やはり臨機応変にやるしかないと思うのです。どうしても満席なのに、これを入れようとするという時は、やはり、皆、しかめっ面をします。

水谷：でも、とても厚かまさが伝わってくると不快感があります。どんなに混んでいても平気

でそのままというのと「すみません」と声をかけてくればいいですよとなりますし。

汐見：そうですね。私は、このような仕事をしていますから、空けてあげてくださいと言うタイプなのですが、それでありがとうという顔をしてくれるとホッとしますが、当然のような顔をされるとムカッとします。それは臨機応変でやるしかありません。

飛行機は、なぜ赤ちゃんが飛行機で泣くのかは、よく分かっていません。どうもお母さんが飛行機に乗り慣れていなくて、どうもお母さんの不安が赤ちゃんに伝わってしまって、赤ちゃんがとても不安になるのではないかと。お母さんが平気であれば、意外と平気だったりします。気圧の変化に対応できなくて、それで泣いているのか、その辺りよく分かっていなくて、あれこそ、本当にお母さんはかわいそうです。そういう時は、キャビンアテンダントの人がお手洗いに行ってお母さんかきあげてくださいと言ってくればいいのですが、それも駄目です。そういうケースについては、どうするのかは、少し多少配慮のやり様を考えてもらいたいです。本当にかわいそうなのは赤ちゃんよりお母さんです。

水谷：特に国際線はかなり手前から徐々に高度を下げます。我々も耳がおかしくなりますから、子どもは耳抜きもできませんので、泣いた時に気圧調整ができるということもあるでしょうが、私もスイスに行った時、かなり手前から急に泣き出して、私も耳の圧力を感じましたから、その要素はあると思います。国際線は高度が高いですから。

汐見：私の知り合いの保育士さんは、隣の子どもさんが泣いてどうしようもない時に、ハンカチ1枚とレジ袋をだして、それをくしゃくしゃばーとしたら、泣き止んだということでした。そういう人がいればいいですが、そういうケースを考えて、赤ちゃんの泣き声が嫌いだという男性にとっては耐えられないと思います。でも、泣かれているお母さんはもっと大変なのです。

水谷：先生のおっしゃることがまず前提にあって、1歳半ですと、平日にお迎えに行った時などは聞くとか見るとか受け止める部分が比率として多い関わり方というのが大事であると思います。こちらからの要望なり何か働きかけで、こちらがアウトプットするよりも、相手の1歳半の子どものしていること、訴えていること、行動していることを共感的にみたりとか面白いと言ったりして受け止めていくということは必要だろうと思います。私も保育園に行っている時は、1歳半の子どもは、終わりが無いぐらい単純なことを繰り返す。付き合いきれないぐらいです。それを付き合いきれないという顔をせず、同じようにやっているところを納得をして1時間半ぐらいやっていた時もあります。積木を積んで倒すだけです。だから発達的な特性においても単純ですが、その付き合い方が必要であると思います。それも嬉しそうに付き合う。これはポイントではないかと思えます。

一色：いいお話をありがとうございました。

一般F：今2歳半の娘がいるのですが、少し先天的な病気があるので、怪我をするとよくないことがあるので、つつい危ないと言ってしまって、駄目だと言ってしまっている気がします。2歳までに関係するとおっしゃっていました。もうすぐ3歳になるのですが、大丈夫でしょうか。

汐見：今、日本のお母さんは何の援助もなく、従来であれば、ちょっとおばあちゃんに見てもらうとか、兄弟に見てもらうなど、必要なところで手を抜くことができました。それが出来ないと煮詰まってしまう。すると子どもを、ゆとりを持って見ることができない。それでつい爆発してしまう。ある調査では、3歳児に対して、頭にきたら叩いてしまうお母さんが85%というのが出てきたりして、それだけ1人で子育てしていることの大変さがあるのが今の子育てだと思います。

あるワーキングマザーの座談会で、子育てを楽にする秘訣は何かという、赤ちゃんの時に厳しくするに限るという意見が出て驚いたことがあります。これは実感なのだろうと思いつつ、これは子どもの自尊感情を下げってしまうような原因になってしまっていると思いました。今のお話を聞いていると、なるべく子どもを自由にしたいけれども、怪我をさせては困るからつつい言ってしまうというのは、それは子どもさんに伝わっていると思います。私のことを思っていてくれているというのが解っていると思います。そういう場合と何かやろうとしている時に「何をしているの」とか「何度言ったらわかるの」と親の言うことを無視すると自分は愛してもらえないのではないかと感じているのでは子どもに育つものが違うと思います。後者だと、自分をどこか知らないうちに我慢をして、その我慢していることが段々分からなくなって、親受けすることは一生懸命できるようになってきて、親から見ると、家の子はいい子だとなるけど、本当の自分の願いとか心持ちは自分でよく分からない人間になってしまう怖さというのはあります。常にママはどう思うのかという顔をして、そういうことを自分の主人が自分の主人でなくなるわけです。それは怖くて、そういう子どもたちが少しずつ増えてきたのかもしれない。でもそれは、親の責任というより、親もそこまで一生懸命やり方を分からずやっているだけで、それは社会の方がほぐして行って、もっと、お母さんがやらなければならないという切迫感を減らしていかなければならない。

もう一方で、やはり小さい時に厳しくやり過ぎると、子どもの心はしんどくなるからということで、その辺りは上手にお母さんがガス抜きしようねということを伝えていくことを両方やるしかない。

今お話を聞いた限りでは、分かっているやっておられるようですので、問題はないと思います。

一般F：安心しました。ありがとうございました。

一色：今日は少し長くなりました。実は汐見先生が今日のテーマ「子どもを人間として見る」これは「見るということ」という本が出ているということをおっしゃいましたが、今日のお話の中で色濃くいろいろなこととお話していただいたのですが、汐見先生の本音だと思います。先生の本音では教育という営みがあまり好きではない。その延長線で、教育学、特に学校で教えることを対象とした教育学もあまり好きではない。私は自分自身が誰かに教育して育ったと思いたくない。自分のことは自分で葛藤しながら自分で育ててきた。自分が育ててきたのは、自分だと思いたい。ということ「子どもを人間として見る」というところに書かれています。そういうベースがあって、今日のお話になったと思います。それで、子どもを人間として見るという時に、その本の中では、感情や情動が認識に深く関連しているという非常に重要なテーマが入っています。認識と感情という部分でいうと、脳科学と保育研究も繋がってくるのではないかというお話もあります。その辺り、これから、具体的に、一般の方にもわかるようにいろいろ活動していただきたいと思います。

では、今日の講演会を終了したいと思います。どうもありがとうございました。